

横浜媽祖廟建立の背景から見た中華街における役割

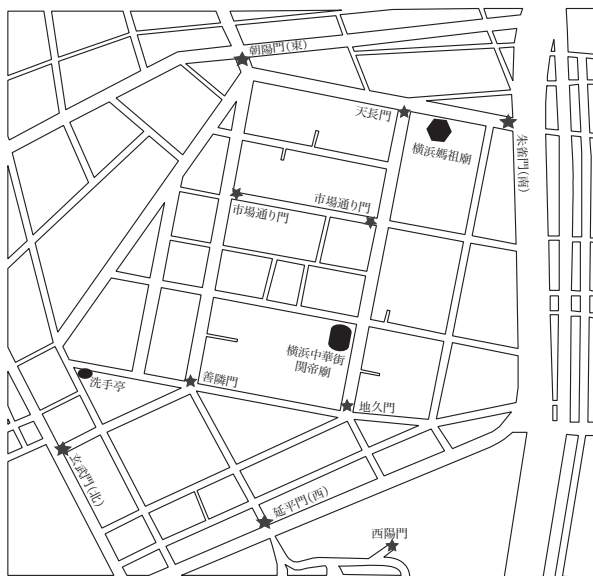
飯田 樹 与

文化人類学・宗教学・日本思想史専門 博士前期課程2年

1. 調査地概要

横浜中華街とは、東西南北に配置された牌楼で囲まれた約500m四方の地域をいう。そこは中国系住民の居住地であるが、同時に有名な観光地でもある。とくに昨今は、横浜市や神奈川県などの地方自治体から観光地「チャイナタウン」として大きな期待を寄せられている。このような地域では、住民は観光客の視線を常に意識せざるを得ない状況にある。

横浜の都市形成は、江戸末期、日本が欧米列強に開国を迫られ、1859年に開港したことに端を発する。横浜中華街の形成もまた、開港とともに貿易の仲介者¹⁾として欧米商人に従ってやってきた中国人が移住したのが、その始まりである。こうして来日した中国人は震災や戦災といった困難を乗り越えて、日中間の問題や大陸台湾間の問題に影響されながらも今日に至っている。



横浜中華街地図

2. 調査目的

横浜媽祖廟は、中華街の表通りにマンションを建設しようとする計画に対して住民有志が反対し、その土地を買い取って建立したものである。本プロジェクトでは、この横浜媽祖廟を建立した中華街の有志を中心に聞き取り調査を行い、「横浜中華街における横浜媽祖廟の意味とは何か」を明らかにすることである。

3. 調査期間と調査方法

本調査は、2010年5月6日、5月16日、6月2日～4日、7月7日～14日、8月3日～19日の期間。横浜媽祖廟と横浜関帝廟のスタッフからの聞き取り及び横浜媽祖廟での参与観察のほか、横浜媽祖廟建立時の関係者や廟の設計者からも聞き取りを行った。

4. 調査結果

本調査から以下の3つのことがわかった。

- 1) 横浜中華街の形成初期から媽祖は伝わっていたこと。
- 2) 横浜媽祖廟建立は横浜中華街の街づくりの一環であること。
- 3) 横浜媽祖廟は横浜の華僑華人の媽祖信仰を基盤とせずに建立されたこと。

1) 横浜中華街における媽祖の伝播

1-1. 媽祖信仰とは

媽祖とは航海の安全を司る女神であり、中国の北宋時代に実在した林氏の娘だといわれている。現在、その生地である福建省湄洲島に媽祖廟の本山を置いており、また中国や台湾各地に多くの廟がある。媽祖は、広東、福建、浙江、台湾などといった海辺地方の人々にとって海上守護の信仰対象となっている。また、航海に深く関係して²⁾、華人や華僑の人々にとっても信仰の対象になりえた。媽祖は、海を渡り文化や

生活様式が全く異なる諸外国に移り住み、その地の人々や環境に適応しながら生活する華僑や華人と深く関わりのある神だといえる。

1-2. 横浜中華街と媽祖信仰

横浜中華街もまた古くから媽祖と関わりを持っていた。横浜開港後しばらくして建立された1代目関帝廟(1871～1923年)の廟内と清国領事館内に、媽祖が祀られていたという。また、1代目関帝廟と清国領事館で祀られていた媽祖像と同一のものかはわからないが、その後の2代目(1925～1945年)あるいは3代目関帝廟(1946～1986年)内にも媽祖像があったという。当時の媽祖像は信者の手によって箱根観音に移された。恐らく移された時期は1986年に3代目関帝廟が焼失した時で、難を逃れた媽祖像を別の場所(箱根)に移したと思われる。現在、箱根観音ではその媽祖像を安置し壮麗に祀っている。



箱根観音に祀られる媽祖像

以上のことから、媽祖像は清国領事館や関帝廟の中に奉祀されていたのは事実のようだ。つまり、横浜中華街の華僑社会の中で媽祖がまったく伝わっていなかったというのは誤りである。そうした中で、どのくらい周知され、信仰を集めていたのかはわからないが、古くから横浜に媽祖像が伝わっていたことは確かである。

先に、媽祖は海外に居住する華僑にとって信仰の対象であると述べた。この横浜の華僑社会においても、媽祖との間には深い関わりがあるといえよう。

2) 横浜媽祖廟建立の背景と横浜中華街の街づくり

2-1. 横浜媽祖廟建立計画の背景

横浜媽祖廟の建立の発端は、2003年に(株)大京が南門シルクロード沿いの一角にマンションを建設する計

表1 横浜媽祖廟建立の経緯

2003.9	(株)大京が南門シルクロードの一角にマンション建設を計画。
2003.10	(株)大京が「横浜中華街発展会協同組合」等関係者に説明会を開催。
2003.11	(株)大京と協議を設け、大京から買い取ることで合意。
2004.6.19	横浜媽祖廟設立(発起人総会) 横浜媽祖廟理事9名推薦、決定。
2004.6.19	設立理事会
2004.6.24	媽祖廟用地売買調印式
2004.10.25	福建省媽祖視察旅行 期間：2004年10月25日～10月28日
2004.11.8	台湾媽祖視察旅行 期間：2004年11月8日～11月11日
2004.12.21	横浜媽祖廟第一回評議員会
2005.2.14	横浜媽祖廟新築工事入札説明会
2005.3.25～26	横浜媽祖廟新築工事請負業者は清水建設に決定。
2005.4.6	横浜媽祖廟地鎮祭
2005.4.7	横浜媽祖廟新築工事説明会
2005.4.18	横浜媽祖廟地鎮祭(杭打ち式)
2005.4.28	福建媽祖生誕記念行事視察 期間：平成17年4月28日～5月3日
2005.4.28	北京・福建中国調達品工場視察検査 期間：平成17年4月28日～5月1日
2005.6.23	横浜媽祖廟第二回評議員会
2006.3.17	横浜媽祖廟開廟

画をし、横浜中華街発展会協同組合など中華街に住む現地住民に説明会を開いたのが始まりである(表1参照)。このマンション建設計画に対し中華街側は、街づくりの観点から建設に反対した。なぜなら中華街は商売をする場所であり、そこにマンションが建ってしまうと隣接する元町との人の流れが悪くなってしまうためである。

また、中華街と関係がない新住民がマンションに同居することで、街のイベントにも悪い影響を及ぼす恐れもある。たとえば、「中華街のイベントに明るくない住民にとって、祭りで使われる邪を祓う爆竹の音はうるさいだけの騒音である。こうした人々から苦情が寄せられると、祭りの音を小さくするなど配慮しなければならなくなる」(中華街関係者談)。中華街の祭りやイベントが縮小あるいは廃止ということは、中華街の文化と伝統を失わせる危険性もある。

こうした観点から反対運動が起こり、中華街「街づくり」団体連合協議会³⁾がマンション建設業者の大京と交渉した結果、その建設予定地を借金して買い取るようになったのである。

表2 横浜中華街の街づくりの推移

年号	街づくり活動内容
1953	横浜商工会議所、横浜市、神奈川県による「チャイナタウン復興計画」
1956	任意団体の中華街発展会が発足
1955	牌楼門（初代の善隣門）建造。中央の看板に中華街と書かれたことから、中華街の名称が定着
1970	西門を建造
1971	協同組合法に基づいて中華街発展会が法人化 東門を建造
1976	南門を建造
1977	北門を建造
1986	第1回春節祭開催（2月）
1989	2代目善隣門落成。牌楼門から「善隣門」に改称。以降、門は新しく設置 あるいはリニューアル
1990	第4代関帝廟落成
1992	横浜中華街「街づくり基本構想」を策定
1993	横浜中華街「街づくり」団体連合協議会が発足
1994	発展会通信第1号、中華街マップ（横浜中華街街道指南）を発行 延平門落成
1995	横浜中華街憲章を制定 6基の牌楼（朱雀門、玄武門、地久門、天長門、市場通り門の2基）が落成 地区内サイン計画を実施（矢羽式ボール、案内板など） バンクーバー市チャイナタウンと横浜中華街との姉妹提携調印
1996	インターネット横浜中華街ホームページを開設 九龍陳列窗（西門通りに面した横浜中華街ショーケース）が完成
1998	洗手亭（中華街風公衆トイレ）を加賀町警察署の角地に設置
1999	We are Chinatown を登録商標・I love Chinatown を発表 横浜中華街オフィシャルガイドブック初版発行 横浜中華街自動車交通量調査の実施と交通対策基本計画を策定
2000	会芳亭（山下町公園再整備による中華街風あずまや）が完成
2001	西陽門落成（JR石川町駅改良、駅前マンション建設と合わせて） 横浜中華街大通り環境整備基本計画を策定
2002	横浜中華街来街者調査（歩行者通行量とアンケート調査）を実施 セントラルベイ YMC 構想（山下公園通り会・元町SS会・中華街発展会） を策定
2003	朝陽門落成（これにより横浜中華街のすべての牌楼が完成） Chinatown 80（横浜中華街インフォメーションセンター）開設
2004	みなとみらい線「元町・中華街駅」開業 横浜天后宮（媽祖廟）用地を取得
2005	横浜中華街大通りの環境整備事業が完成（ライブタウン整備事業などの補助金と地元負担金）
2006	横浜天后宮の開廟 横浜中華街「街づくり協定」を施行（運用のために横浜中華街「街づくり委員会」が発足）
2007	防犯カメラの設置（横浜市安全管理局所管） 横浜都心機能誘導のための都市計画（特別用途地区）の変更
2008	首都高速道路石川町出口の供用 関内地区都市景観形成ガイドラインの制定（景観法） 横浜中華街来街者アンケート等の実施（横浜市経済観光局）
2009	横浜開港150周年

地区計画策定の動き
が生まれ、街づくり
協定につながる

（加藤2009表1，菅原2009，横浜開港資料館2009より筆者作成）

2-2. 横浜中華街の街づくり（表2参照）

横浜中華街発展会協同組合というのがある。この団体は、前出した中華街「街づくり」団体連合協議会が街づくりの方針を決めていくのに対し、それを実行に移す実働部隊にあたる。この発展会と協議会の理事長を務める林によると、来街者には中国の伝統や文化を感じてもらい、また街の住民には母国中国の祭りや行事、習慣を知り、子孫に伝えることを願って街づくりをしているようだ。そのために、横浜中華街は商売目的の単なる商店街ではなく、中国文化を背景に、すべての住民が一つにまとまっていくことを最大のコンセプトにしている。街づくりにおいても、さまざまな中国の文化（料理、祭り、行事、言葉、建物、門、色、宗教、占い、習慣など）がひとつの町のなかでつながっている中華街の特性を生かし、それを担う団体組織（獅子舞を披露する両中華学校の生徒及びOB、各同郷会など）と協力し合いながら町を盛り上げている。

今回の反対運動もまた、マンションの建設によって中華街の靱帯を弱めかねず、それを回避する意味も含まれていたと考えられる。また、この媽祖廟建立予定地を購入する一連の出来事を経て地区計画策定の動きが生まれ、2006年3月に横浜媽祖廟が開廟する同年に、横浜中華街「街づくり協定」が施行された。

3) 横浜媽祖廟について

3-1. 媽祖廟に決定した理由

街づくりの構想として、媽祖廟の他に孔子廟と横浜中華街博物館の建設も候補にあったようだ。しかし、博物館を建設するには敷地面積が小さすぎるという理由から横浜中華街博物館は候補から外れた。媽祖と孔子、どの神様を奉祀するかを決めるに当たっては、媽祖は華僑の行く先々にある神であること、ニューカマー（いわゆる新華僑）の多くが媽祖信仰の盛んな福建及び台湾出身であったため、彼らの参拝を見込んで決定した。また、かつてこの横浜中華街に媽祖が祀られていたこと、風水の観点から当該地は海の女神である媽祖がふさわしかったことなどから媽祖廟を建立する運びとなった。

3-2. 地元の不在

横浜の華僑社会において古くから媽祖は伝わっていたが、実際に2006年に開廟した横浜媽祖廟に参拝する古くから中華街に住む華僑（老華僑）の姿はあまり見受けられない。また、信者会のような信者組織もない。参拝者を見ていると、そのほとんどが観光客で、信者はというと参拝日の毎月1日と15日に合わせて

来る人が多い。

媽祖廟を建立する際の話である。「媽祖廟の建立にはいっさい信者を入れなかった。日本にも日本媽祖会という媽祖を信仰する組織があるが、彼らや媽祖に関わりのある人を横浜媽祖廟に取り込まなかった。媽祖のご神体を造る際も、信者を関わらせずに、媽祖廟の理事達が中国の湄洲島でご神体を造り魂入れて運んだ」（横浜媽祖廟設計者談）。

こうした媽祖廟の地元信者の不在の背景には、その建立方法にも問題はある。媽祖廟の建設予定地の購入費用及び建設費用は銀行からお金を借りて一気に造ったのである。地元の人々から見れば、ごく一部の人によって建設が推し進められた観が否めない。

地元の不在とは逆に、媽祖廟建立によって台南大天后宮との新たな関係が築かれた。現在、横浜媽祖廟では、廟の運営についてわからないところがあれば大天后宮に問い合わせ聞いている。また、媽祖廟の開廟を祝う際に中華街全域で媽祖の神輿巡行が催されるが、その際には大天后宮から神輿の担ぎ手などが応援にやってくる。

以上のように、横浜媽祖廟は地元民の信仰を基盤にして建立されたとは言いがたく、組織だった信者団体もない。あくまで個人的に廟に参拝する形態である。横浜媽祖廟は地元民にあまり定着していない一方で、台湾との新たな繋がりも生まれた。台南大天后宮の人々から神事の行い方から神輿の担ぎ方、廟の活動内容まで学びあっているところである。

3-3. 横浜媽祖廟の内部構成

横浜媽祖廟は、廟の全般的な運営を行う理事が6名、廟の運営が正確になされているのか確認をする評議員が18名、実際に廟を運営・管理している事務・現場スタッフが12名からなる。理事と評議員は給与がなくボランティアである。理事は、中華街にあるもう一つの廟である横浜中華街閩帝廟の理事とほぼ同じ構成員からなり、中華街にあるお店のオーナーである。媽祖廟の開廟当初、華僑と華人と日本人が初代の理事に入っており、現在は華人と華僑からなっている。評議員は、横浜中華街の各組織の代表者からなり、その構成員も日本人、華人、華僑と括りがある。横浜媽祖廟の理事、評議員の構成を見ると、華僑だけで成り立っているのではないという現在の中華街の幅広い人間関係を表しているように見える。

開廟当初の事務・現場のスタッフは、シルバー人材から派遣された日本人であった。現在は約半数以上は日本人スタッフであり、残りは中国や台湾からきた

人々である。この仕事に就く以前から媽祖を信仰していた者はおらず、その媽祖の名称を知っていた者もごく少数である。

媽祖廟内部の構成をみると、その来歴はさまざまである。今や中華街に関わる者は華僑だけでなく、日本に帰化した華人や日本人もまた中華街に組み込まれていると言えるだろう。

5. まとめ

横浜媽祖廟は、信仰の場であるものの横浜中華街における宗教的な機能は少なく、観光地「横浜中華街」を打ち出す街づくりの一環で建てられたといえる。その背景には、「街づくり」のコンセプトにあるように中国文化の表出がある。商業地域である横浜中華街では、人を呼び込むために、日本国内にいても中国文化にふれられる街として古くからある組織と協力しながら街づくりを進めている。

横浜には古くから媽祖を祀っていたものの、現在の横浜媽祖廟はその信仰の土台を取り除く形で造られた。古い華僑社会から乖離した状況にある一方で、新

たに「街づくり」という観点で形成された社会や人間関係の中で、中国文化を表出した場所としての機能もっている。それは、台湾との関係を深めたことで、より本場・中国の文化を取り入れる橋渡しとなった。台湾との太いパイプをもった横浜中華街が、今後どのように変わっていくのかを見ていきたいと思う。

注

- 1) 中国は日本より先に開国したことで既に欧米諸国と取引をしており、中国人は上海や香港の欧米商館で西洋の言葉や習慣を身につけ、また、漢字によって日本人と筆談できると考えられたため、欧米商人に重宝されたのである。
- 2) 日本で言う船神様のように、媽祖像を船で安置し祀っていた。
- 3) 中華街「街づくり」団体連合協議会は、横浜中華街発展会協同組合、各同郷会、中華街の各通りの会、両中華学校のOBOG会、婦人会、横浜閩帝廟、横浜媽祖廟など、横浜中華街にある23団体の代表者からなり、それらの組織の上に位置している。

参考文献

- 朱天順『媽祖と中国の民間信仰』平河出版社、1996年。
林兼正『なぜ、横浜中華街に人が集まるのか』祥伝社新書、2010年。



横浜中華街



媽祖の巡行



媽祖廟（外觀）



媽祖廟（外觀②）



媽祖廟（媽祖ご神像）